

南海に於ける民族移動の一つの停滞地とも考えられるフィリッピン群島に於て容易に見出される。

即ちフィリッピンに産する *C. Mercadoi* Vidal はこれを Luzon 島北部西海岸地方及びルソン海峽 Babuyan 諸島中の Calayan 島等に住する Ilokano にて Kasiu²⁾ と呼ぶ事である。これは明かに Kasu 系に属し、我国の Katsura に連るものと言える。フィリッピンに於ける Spain 系の肉桂の呼称は Canela であつて、又 Kanila, Kanilau, Kanilao 等となつて本種及び *C. Burmanni* Bl., *C. mindanense* Elm. 等に広くあてられる。この事から言つても Kasiu は決して近世のものではない。

次に更に興味ある事実は *C. Mercadoi* をフィリッピン Tagalog にて Samiling, Similing²⁾ と呼ぶ事であつて、これこそ現在印度 Madras 近くに行われる Dravida 系の Telugu 語で *C. zeylanicum* Breyn. を呼ぶ Sanalingu, Sanalinga³⁾ に一致する。この Sanalingu は恐らく肉桂を示す極めて古い土語であつて、この言葉が印度を出てフィリッピンに伝つている事は肉桂を示す Kasu も亦古代オリエントより印度を経て南海に出でフィリッピン及び我国に及んでいる事を十分に示す。

なお台湾に於てタイワンニッケイ *C. pseudo-Loureirii* Hay. を Paiwan にては Marukami⁴⁾ と呼ぶが、これは Mindanao 島に於て Bagobo の肉桂近似の *C. mindanense* を呼ぶ Kami²⁾ なる呼称の流れをくむものなる事が明かである。

又フィリッピンにては Negros, Cagayan 等にて *C. Mercadoi* を Kuliuan, Kuliun, Uliuan²⁾ と呼ぶが、これはインドネシア一般の *C. culilawau* Bl. の呼称 Kulilawan 及び Java にて *C. javanicum* Bl. を呼ぶ Kulitlawang kechil⁵⁾ と同様明らかに Kuliawan 系であつて、以上のいずれもが明らかに民族の流れの南方からの北上を示すものである。

(大阪工業技術試験所)

文 献

- 1) 藤田: 台湾博物学会会報, 34: 350 (1944); 植研, 25: 63 (1950); 26: 303 (1951); 香料, 20: 32; 22: 10 (1952).—2) Brown: Minor Prod. Phil. Forest, 2: 200 (1921); Merrill: Enum. Phil. Flow. Pl. 2: 187 (1923).—3) Kirtikar, Basu: Ind. Medic. Plts. 2: 1101 (1918); Watt: Com. Prod. Ind., 313 (1908).—4) 金平: 台湾樹木誌, 209 (1936).—5) Burkill: Dict. Econ. Prod. Malay Penins., 552 (1935).

○ミヤマウメモドキ (原 寛) Hiroshi HARA: The identity of *Ilex nipponica* Makino.

東北から中部、近畿地方の山地水湿地に見られるウメモドキの一種に、ホソバウメモドキ *Ilex spathulata* Koidzumi と名付けられ、近年は往々オオバウメモドキ *I. Nemotoi*

Makino と呼ばれているものがある。ウメモドキに比して葉は長く倒卵状をおび基部は長楔形をなし鋸齒は疎で低く質はうすく毛少く果硬はより細長である。I. *Nemotoi* Makino の基準標本は牧野先生宅の腊葉室に現存し、これはやや大形の葉をつけたウメモドキの北方形で葉下面にも毛が多い。これと同時に発表されたミヤマウメモドキ *Ilex nipponica* Makino の方が反つてここに問題とした種類で、従つてその正名となる。寺崎、続日本植物図譜 f. 2882 & 2883 (1938) 及び牧野、日本植物図鑑 f. 1103 (1940 & 49) に *I. Nemotoi* Makino とあるものは誤で共にこのミヤマウメモドキである。又寺崎、続日本植物図譜 f. 2884 & 2885 (1938) にホソバウメモドキとして図解されたものは、フウリンウメモドキの狭葉形である。終に基準標本の閲覽を御許し下さつた牧野先生に深謝する。

○ウラジロナツハゼの新産地 (得居 修) Osamu TOKUI: *Vaccinium Oldhami* var. *glaucescens* Okuyama found in Ehime Pref.

我国の亜高山帯の最南である石鎚連峯のフロラについては、従来多数の学者に依つて数多くの固有種が発見されているが、なお今後の調査に待つべきものが多いと思われる。筆者は1952年7月面河溪パノラマ台附近でウラジロナツハゼを見出したが、これは四国での新産地と思う。この植物は初め中井博士(1913)によつて朝鮮、莞島及び奥島で採集され、後に忠南道鷄籠山でも発見された。又本州では松田孫治氏(1935)が羽後山瀬国国有林内で見出した。面河溪パノラマ台附近はチャボツメレンゲ、セッコク、ミヤマママコナ、クロソヨゴ、ヒカゲツツジ、コウヤマキ、ヒメコマツ等が生育している。標品の同定をして戴いた植木博士にお礼を申し上げる。(松山農科大学林学科)

正 誤 (第 28 卷 11 号)		Errata (Vol. 28, No. 11)	
頁 page	行 line	正 read	誤 for
323	14	1 核を持つ	核を持つ
325	25	monokaryoplast	monokaryoplast
330	10	rather	aather
"	24	more or less	more less
343	19	<i>Thuidium</i>	<i>Thidium</i>
"	29	<i>Thuidium</i>	<i>Thuidjum</i>
344	4	have been seldom	have seldom
"	20	obtusiusculae	obtusinsculae
346	16	Honshu	Honseu
"	23	Anthela	Authela
347	3	Mihashi	Mikashi
"	下から 3 from bottom	主眼と	主張
348	4	下水内 <small>ミノチ</small>	下水内 <small>ミナチ</small>
352	下から 6 from bottom	base	bese